

“公立ではない公共”の劇場をデザインする

野邊壯平 透明体育館きらきら／国際こども・せいねん劇場みやざき
児玉孝文 NPO 法人 MIYAZAKI C-DANCE CENTER
豊福彬文 宮崎大学国際連携センター
高橋るみ子 宮崎大学産学・地域連携センター

1. 研究の背景及び目的

Noismが2004年に新潟で設立されてから15年。未だ国内では後に続く劇場専属舞踊団は現れていない。その一方で、多くのダンスカンパニーや振付家・ダンサー(以下、「アーティスト」という。)は、創作活動や稽古のための空間確保(有料・無料)に労力を割いている。以上が、本研究の背景となっている。

本研究の目的は、自走化を図る若いアーティストが拠点を持つためのプログラムをデザインし、公立ではない公共の劇場(創作活動や稽古・上演のための専用空間)のモデルケースを提出することである。なお、ダンスによる“誰一人取り残さない世界(SDGs)”の実現を本研究の上位目標とした。

2. 研究の仮定

昼は園児が走り回る保育園の体育館が、夜と週末にはコンテンポラリーダンス等を鑑賞できる劇場にトランスフォームするデザインは、空間活用とアート教育、地域の保育支援、アーティスト育成といったいくつもの顔と役割を持つ。そして、芸術に触れる機会や場が少ない子供や地域住民に対し、保育園との連携で地域にも、子供にも、アーティストにも開かれたものとなるだろう。

3. 研究方法

本プログラムは、地域環境による子供の芸術体験(特にダンス)の格差の是正・解消を図る豊福、野邊、児玉(以下、「んまつーポス」という。)と、宮崎市内の認可保育園「きらきらアート保育園」、地域を同じくする大学が協働で実施する。

「んまつーポス」は、2008年、アーティストの自走化の先導を目的に、アートNPO法人を設立・運営しているコンテンポラリーダンスカンパニーである。また、「きらきらアート保育園」は、元公立中学校の校長が、2013年に無認可からスタートさせた認可保育園であり、その経営ミッションに地域貢献を大きく打ち出している。近くに九州一の売り場面積を持つ大型商業施設がある。なお、モデルケース「透明体育館きらきら／国際こども・せいねん劇場みやざき」(以下、「劇場」という。)は、保育園の新設体育館を空間活用しているが、新設は必ずしも本プログラムの条件ではない。想定したのは、園児が発表会をするような既存の多目的スペースやホールである。

4. クラウドファンディングの実施

クラウドファンディング「FAVVO」を実施し、デザインしたプログラムに対し、アーティストが興味・関心を示すか否かを探った。実施期間は、37日と短く設定したが、目標額を超える支援(123%)が集まり、支援者数は232人(内、宮崎県外から62%)であった。職種の内訳は、教育関係者が29%、芸術関係者が26%、企業(個人・団体)が9%、公共文化施設関係者が6%、大学関係が4%、その他が26%である。芸術関係者の半数は、アーティストである。また、海外ディレクター(韓国、ルーマニア、香港)の応援メッセージからは、本デザインに対する関心の高さがうかがわれた。

5. 劇場稼働状況(2019年2月～9月)

これまでの劇場の来場者数は、のべ4,001人である(内、子供は2,457人で約61%)。平日の保育活動を除いた稼働状況は以下の通りである。

- ① 公演：柿落とし公演、「月一公演」6回、「未就学児ようこそ劇場へ」4回、「ごちそうアーツ」。チケット等の収入額は451,300円。
- ② ワークショップ：きらきらアート保育園対象プログラム「んまつーポスの時間」、1年生定期講座、インクルーシブプログラム「芸術の学校」、教員対象実技講習会「じゃがじゃがサマーセミナー」、他
- ③ トレーニング：一般市民対象「Canトレ」
- ④ 展覧会：第1回小さなアートフェスティバル
- ⑤ アート会議：宮崎県、アーツカウンシルみやざき、宮崎県女子体育連盟、他

6. キッズデザイン賞(2019年)

本プログラムが再現性のあるデザインであるかを探るため、さらに若手アーティストの実態を、キッズデザイン協議会の役員(富士通、凸版印刷、積水ハウス、森ビル等)や会員(省庁や自治体、企業)に広く知ってもらうため、異分野の専門家が評価するキッズデザイン賞の「子どもたちの創造性と未来を拓くデザインのクリエイティブ」部門に応募した。その結果、「場」の持つポテンシャルを引き出す非常にユニークかつ良質なプログラムであると評価・受賞(経済産業大臣賞)した。

7. 今後の課題

クラウドファンディングの達成状況からは、アーティストの本プログラムに対する関心と期待の高さがうかがわれた。しかし、本デザインは、自走化を図るアーティストの参考にはなるが、安定した自走を保証するものではない。持続可能なアーティストの自走化体制を確立するためには、志を共にする学校園や企業等とパートナーシップを組む必要がある。専用空間の可能性を拓き、活用していくのはアーティストの「一歩踏み出す勇気」(園長)なのである。